

# 源氏物語古筆切事始

——筆者不明の断簡をよむ——

## 一 「事始」の事始め

二〇〇五（平成一七）年五月、日野校舎に文学部があったころ、学内で中古文学会の春季大会が開かれた。その際、関連行事として香雪記念館で併催したのが「源氏物語展」（実践女子大学文芸資料研究所・中古文学会の共催）。『源氏物語』明融本・古活字本、『紫式部集』、寂恵本『拾遺集』などなど、実践女子大学所蔵本の精髓ともいふべき古典籍を公開し、参集した方々の好評をいただいた。『源氏物語』というブランド力によるものといえるかもしれない。

その後、さらなる公開要請の声に応えるかたちで当該物語の展覧会を学内で開く機会が多くなり、二〇〇九年一月に、実践女子学園創立一一〇周年記念として「源氏物語

横 井 孝

の古筆切」シンポジウムと展覧会をおこなったことはひとつの転機になった、と思われる。——というのは、「古筆切」が一般的な関心から外れた、かなり専門的な分野であり、敬遠されるのではないかという当方の思い込みに反して、一般の多くの参加者に恵まれ、同種の企画を希望する声もうかがって、関心が必ずしも低くないということを実感したからである。

右のシンポジウムにパネリストとしてご登壇ねがった田中登（関西大学教授）・池田和臣（中央大学教授）・別府節子（出光美術館学芸員）・今西祐一郎（国文学研究資料館館長）（以上、発表順）、またそのほかにも仁平道明（和洋女子大学教授）の各氏を先達として、その後も継続的に指導を仰ぐことになり、当方が専門の標的とする『源氏物語』

への傾斜とあいまって、当該物語の収集をポツポツとはじめたのがその頃であった。

茶掛けの作品などを代表として「古筆切」として流通するものといえば、なんといっても歌切が圧倒的な量ではあるが、そちらの方はすでに情報量も豊富であり、かつ、有力な研究も多く見いだしうる。当方のような後発のビギナーの参入する余地は、かなり限定的に思える。一方、歌切との比較であれば数量としては遠く及ばないものの、物語類の断簡は、鎌倉期の初中期のものが（相対的には）数多く見出せるのに対して、写本の多くが室町期書写のものが主体を占める、という対比的な現状がある。

『源氏物語』のテキストは、池田亀鑑らの膨大な作業によって『校異源氏物語』『源氏物語大成』に結実して以来、

大島本源氏物語は青表紙本中最も信頼すべき一証本であるが、その数量において、またその形態・内容において稀有の伝本であり、校異源氏物語の底本として採択、その稿を起した当時はもちろんのこと、その後二十余年に至るもこれを凌駕する伝本の出現を聞かない。<sup>(1)</sup>

という池田の指し示した方向に沿って、大島本は絶対的な

地位にまで押し上げられている。近年におよんでようやく再検討がはじまった<sup>(2)</sup>が、現在公刊されている活字本のほとんどが底本としてるように、むしろ「大島本の呪縛」のために、かえって『源氏物語』の本文研究は大きく立ち後れている。大島本の問題点は、乱暴なくくり方をすれば、要するに室町期の写本である、ということに根ざしているのではないだろうか。本文を検討した結果、遡源できる可能性がある——と主張したとしても、その前提条件や論証過程がおおかたに承認されていなければ、平安時代作品における室町後期書写という時間差は、問題として重くのしかかってくるのである。

他方、古筆切は、しよせん書物が解体された断片であって、物語全体からみればごく一部の本文でしかないこと、零細な資料が諸方に点在（もしくは散在）するために、集中的な検討を妨げていること、などの障害（neck）は誰しも想到しうることで、近年まではそれを克服させる魅力が研究者たちに感じられなかったたのであろう。

しかし、ここ数年のうちに、古筆切のもつ情報の重要性について、研究者たちの間で深く認識されるようになっており、断片にすぎないとはいえ、本文研究においてはもはや看過しがたい、という気運が醸成されているのではない。古筆切研究のパイオニアの一人・田中登は、

今日の前にある一枚の断簡の本文が何系統であれ、とにかく、それが鎌倉書写のものなら、鎌倉時代にそのような形で源氏を呼んでいた人たちがいたということだけは確かなことであって、何人たりとも、これを否定し去ることはできない。<sup>(3)</sup>

といい、またこれに先立つて、

鎌倉中期以前に遡る源氏物語古筆切三種を紹介、その本文内容を紹介してきた。……ここである河内本系や青表紙本系というのは、その書写年代から、現在我々が言うところの河内本、青表紙本成立以前の、それぞれ祖本系統の本文の謂である。こうした本文は、『源氏物語大成』の諸本分類に従えば、取りも直さず別本、それも後の混成本ではなく、青表紙本や河内本成立以前の古伝本ということになる。……鎌倉中期にまで遡る源氏物語の古筆切は、平安時代に行われていたであろう古伝本的別本の姿を我々に伝えてくれているという点で、まことに貴重な資料ということができる。<sup>(4)</sup>

とも指摘している。田中が常日ごろ口にするように、藤原定家や源親行らが本文校訂の作業をする前後に流通する

『源氏物語』のテキストは、むしろ「別本」があたりまえなのだ。大島本、あるいは定家本系統の本文がいかに「信頼すべき証本」と見なされようとも、それはあくまでも室町期の本文のもたらす一情景に過ぎない、というべきなのである。もはや「冊子体だけの本文伝流史はいびつなのはなかるうか」とは、別稿で述べたところである。<sup>(5)</sup>

## 二 古筆切入門

古筆切による研究のネックとして、右に「諸方に点在（もしくは散在）するために、集中的な検討を妨げている」ことを挙げた。

さしあたり通覧のためのデータベース、データバンクとして、

- ▼小松茂美編『古筆学大成 第23巻、物語・物語注釈一』（講談社、一九九二年六月刊）、『同、第24巻、物語注釈二／物語・歌論・歌謡』（同、一九九三年一月刊）
- ▼久曾神昇『源氏物語断簡集成』（汲古書院、二〇〇〇年一月刊）

- ▼小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」（伊井春樹編『本文研究―考証・情報・資料―第6集』和泉書院、二〇〇四年五月刊、所収）

▽「古筆切所収情報データベース」(国文学研究資料館・

電子資料館 <http://basel.nijl.ac.jp/~kohitu/>)

などを挙げるができるが、汎用性のあるものを含めても、『源氏物語』にほぼ特化した資料集というと、このくらいのものである。

古筆切の素性を知る手立ての有力なひとつにツレを探す、ということがある。『古筆学大成』『断簡集成』のように図版を通して比較できれば、検索方法として最も有効であり、『大成』の分類が基準になつてはいるが、それとて不完全ではなく、結局は諸方の資料・情報を収集するしかないのが現状だ。

図版で確認するのであれば、膨大なコレクションを一堂のもとに会した手鑑を検することは欠かせない。

『古筆手鑑大成』全一六巻(角川書店、一九八三年

一月〜一九九五年十二月)

陽明文庫の「陽明叢書」(思文閣出版)

徳川黎明会の「徳川黎明会叢書」(同)

細川家永青文庫の「永青文庫叢刊」(汲古書院)

冷泉家時雨亭文庫の「冷泉家時雨亭叢書」(朝日新聞社)

等々のなかの古筆手鑑所収の巻冊があり、名だたる手鑑——国宝四大手鑑「藻塩草」「見努世友」「翰墨城」「大手鑑」などをはじめとして、各種コレクションのそれについても、

単行本として豪華な大型の複製本がある。また、各機関や個人の収集の結果として、近年刊行の入手しやすいところでも、思いつくままに挙げれば、

▼藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』三冊(和泉書院、一九八七年二月〜一九九二年五月刊)

▼田中登編『平成新修古筆資料集』五冊(思文閣出版、二〇〇〇年三月〜二〇一〇年九月刊)

▼国文学研究資料館編『古筆への誘い』(三弥井書店、二〇〇五年三月刊)

▼石澤・久保木・佐々木・中村編『日本の書と紙——古筆手鑑『かたばみ帖』の世界』(三弥井書店、二〇一二年六月刊)

▼田中登編著『古筆の楽しみ』(武蔵野書院、二〇一五年二月刊)

など、この分野では忘れてはならない資料集がある。いずれも書中の解説・解題は簡にして要を得たものばかりで裨益するところ大きい、この中から『源氏物語』の情報を抽出しなければならない。

もちろん、これらを横断するデータベースとして、右に掲げた小林強の「集成稿」があり、国文学研究資料館の電子資料館があるわけだが、もはやそれだけでは古筆切資料の情報が日々更新されているのに追いつかない、という憾

みがある。となると、古筆切の素性を知るためには、相当な手間のかかることを覚悟しなければならないのか。

——しかし、現実には、かならずしもそうではない。そうまだるっこしい方法を、皆が皆とっているわけではないことを、つぎのようなエピソードが教えてくれる。

……当時勤めていた大学の、骨董好きの同僚から、北浜におもしろい店があるから一度行ってみたらと薦められるままに……ラッシュ時をやり過ごすまでの時間つぶし、と店に入ってみた。

「ヤア、先生、珍しくこんなモノが手に入りました」といって主人が見せたのは、さして厚冊とも思えぬ手鑑一帖。見れば、桃山や江戸の色紙あり、短冊ありで、これではね、と諦めなかった私の目に飛び込んできたのは、何か絵巻の詞書とおぼしき一枚の切。極札には寂蓮とある。つぶさに観察すれば、たしかに断簡の書風は、いくらか扁平な、しかし大振りの力強いもので、平安末から鎌倉初期にかけて書道史上流行した、いわゆる寂蓮様のもの。これはひよっとすると、と値段を主人に聞いてみれば、こちらの給料一分。ポーナスまでには間があるし、さてどうしたものかと、しばし躊躇したものの、これだけの見事な切には、めったに

お目にかかれるものではなし、えい、ままよ、というので、くだん一枚、帖から剝がしてもらい、家に持ち帰ることにした。<sup>(6)</sup>

それが大和文華館蔵所蔵、鎌倉期物語絵巻の傑作のひとつ、国宝『寝覚物語絵巻』の失われた一部——つまりツレの断簡だったのである。著者の心躍るさまは微笑ましくも羨ましいが、**出会い以前からの「準備」**がいかに大切かを物語る挿話なのである。

右のエピソードを収める本には、「未知の断簡を何の何切と確定するために、いったいどういう筋道をたどることになるのか」(五二頁)という、ビギナーにとってはありがたい手引きがあったり、「古筆切を学問として扱う」(二四八頁) 具体的な指針として、「書写年代／筆者／書風／料紙／書写内容」という至極まっとうな方法が示されていたり、小冊ながら、古筆切を研究するうえでの基本的な立場が示されていて、参照・玩味すべき一書なのである。

しかし、それにしても、やはり弁えておかねばならないことは前提として存することはいうまでもない。右の書のなかで、いつもの骨董屋に顔を出した著者に、——「取り出してきたものを見れば、どうやら古筆切」、「時代の下がる色紙や短冊に交じって、中にちよつと古そうなもの

が……」。清輔の内裏切だ」（八四〜八五頁）という閃き。

——当該の分野の研究者ならずとも、学問の従事者、あるいはプロとして、これまた当然きわまりないことであろうが、出会い以前からの「準備」というものがどのようなものであるかが察せられる一節ではあるのだ。稿者のごとき初学のディレッタント（dilettante）が、拳々服膺すべきことであることはいうまでもない。

### 三 小野道風筆？『源氏物語』

稿者が兼務する文芸資料研究所の所蔵にかかる無銘の古筆手鑑がある（写真1）。表紙を披けば、まずその巻頭に目に入るのが聖武天皇・光明皇后の經典の断簡と、まさしく手鑑としては本格的なもの——といたいのはやまやまなれど、陽明文庫の国宝「大手鑑」や、出光美術館のこれまた国宝「見努世友」で見ると、いわゆる「大聖武」と呼ばれるような、名物切中の名物切とは著しく品格が異なるし、ほかにもあやしげなものがあつて、専門家筋からは一見してそっぽを向かれてしまう類いのものであろう。たとえば、「在原朝臣業平」筆の極めのある『伊勢物語』断簡などという珍品がある。もうそれだけで、この手鑑の素性が知れてしまいそうだ。

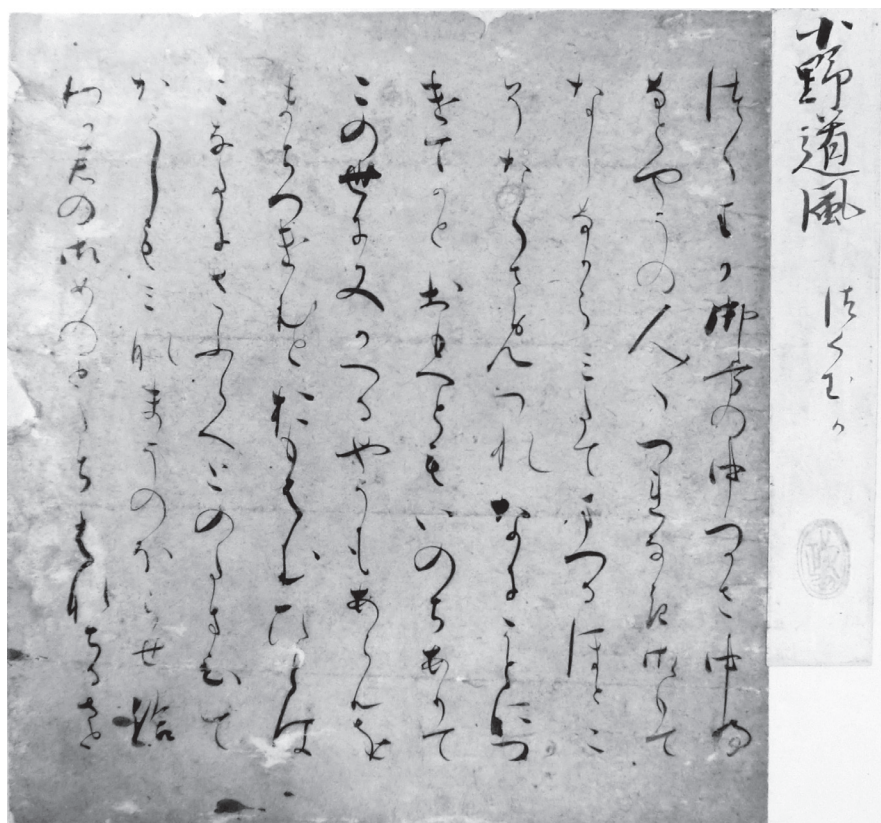


〔写真1〕古筆手鑑（実践女子大学文芸資料研究所蔵）

そのなかに、この一枚が押されていた（写真2）。御覧のとおり、三蹟のひとり「小野道風」という極札が付けられている。道風は康保三年（九六七）一二月に正四位下行内蔵頭を極官として享年七三で没しているので、寛平六年（八九四年）の出生である。

断簡の寸法は、縦一七・〇cm、横一六・〇cm。料紙は斐紙。一面一〇行書、右端が若干化粧裁ちされているらしい。や





〔写真 2〕 伝小野道風筆『源氏物語』断簡（実践女子大学文芸資料研究所蔵）

や特徴のある字体で、連綿はさほど長くない。その内容は、つぎのように読める。

つくわか御方の中つかさ中将	1
なとやうの人くつれなき御もて	2
なしなからみたてまつるほとこ	3
そなくさめつれなにことにつ	4
けてかとおもへともいのちありて	5
この世に又かへるやうもあらんを	6
もかちつけんとおもはむひとは	7
こなたにさふらへとのたまひて	8
かみしもみなまうのほらせ給	9
わか君の御めのとたちはなちるさと	10

末尾に「はなちるさと」とあるのから見当がつくごとく、『源氏物語大成』で検索すれば、すぐに須磨の巻の一節、四〇六頁8〜12行目にあたる本文とわかる。

当該の切は、なんと伝小野道風筆『源氏物語』という珍品だったわけである。これは兼好法師がいうところの「小野道風が書ける和漢朗詠集」の洒落であろうか。『徒然草』第八八段に登場するお節介な「ある人」のように「紫式部撰ばれたる物を、道風書かん事、時代や違ひ侍らん。覚束

なくこそ」といつてくれる人がいなかったのだろうか。

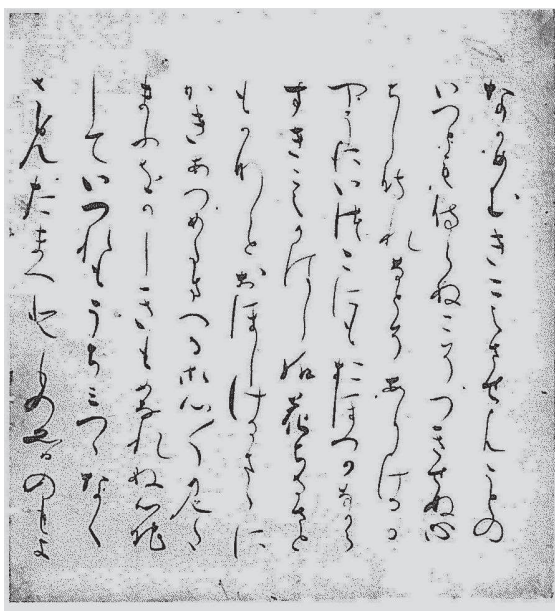
極めの印も「政■」(?)のごとく見えるが、既知の古筆鑑定家ではないらしく、管見にして見たことのないものである。こういう際、村上翠亭・高城弘一ほか『古筆鑑定必携 古筆切と極札』(淡交社、二〇〇四年三月刊)、あるいはそれに影印が併載されている「和漢書画古筆鑑定家印譜」(慶応三年(一八六七)仲冬(十一月)板)が極印を探す必須のアイテム(tool)なのであるが、未収録の印であるようだ。

——となれば、「伝小野道風筆『源氏物語』」という珍品は失笑の種として放り出されてしまうのが関の山であろう。ところが、稿者にとって幸運だったのは、この筆跡にかすかな記憶があったからだ。それもそのはず、古筆切の世界に分け入るための文字通りの入門書、藤井隆・田中登『続々国文学古筆切入門』(和泉書院、一九九二年五月刊)に「伝世尊寺行能筆六半切(源氏物語)」として掲載されているそれと酷似していたのである。

藤井氏の許可を得たので、次にその本から図版を転載する(写真3)。比較して御覧いただきたい。

同書の解説によれば、「須磨の巻のもの、縦一七・五センチ、横一六・二センチ、料紙は斐紙と思われる。本文系統は青表紙本系統」(一七八頁)とある。





〔写真3〕伝世尊寺行能筆『源氏物語』断簡（藤井隆蔵）

一見して両者の酷似は見取れると思う。文芸資料研究所蔵手鑑の断簡（A）の10行目「はなちるさと」と藤井氏蔵断簡（B）5行目の「花ちるさと」の共通部分、A4行目「つれ」とB9行目「つれ」、両者の二文字分のオドリ字の形、など共通部分をあげればきりが無い。

そして何よりも、ABともに須磨の巻の断簡であって、寸法もほぼ同じく、藤井氏の解説のとおりBは『源氏物語

大成』四一九頁12行目～四二〇頁2行目に相当し、両者まさしくツレといふことができるのである。

行能を伝称筆者とする断簡は『古筆学大成』では二種を数え、さらに右書『入門』ではさらに白鶴美術館（神戸市）蔵手鑑の一葉、そして藤井氏蔵のものが増補され、都合四種あることになっているが、四種目のそれに一枚追加することができたということになる。

ちなみに本文系統は、『源氏物語大成』の底本文に対して、表記の差異のほかはまったく異同がない。藤井氏の指摘のとおり、定家本系統とみるべきだろう。

#### 四 筆者不明夕霧の巻断簡

右とは別に、過日、文芸資料研究所に収めることができた数枚の古筆切がある。手鑑か屏風に貼られていた形跡があり、なかには著しく日焼けしてしまつて文字の判読しにくいものがあつたりするが、いずれも鎌倉末期から室町初期ころの書写と見なしうるものではあつた。ただ、極札がなかつたせいか、相場よりもやや入手しやすいものであつた。

極札というものは、前節の「伝小野道風筆源氏物語」のようにまったくアテにならないものがある一方で、筆者名

は信じられないものの「時代相応」と評されることも少なくない。どちらに該当するかは、要するに評者の眼力ということになりかねない。稿者のような経験に乏しく非力な初心者には、極札がないという事態は手がかりがないに等しい。結局このような時、古筆切の素性をあきらかにする方法は、ツレを探すのが最も順当ということになる。

〔写真4〕の一枚は未装の断簡。縦一二・〇cm、横一一・九cmという小六半切。料紙は鳥の子。一面八行書きで、九箇所ほど朱点が見える。虫損と染みがあるほか、斜めに折れた痕がある。内容はつぎのように読める（「・」は朱点を表す）。

いりて・た、ひえにひえ給・上下さはき 1  
たちて・願なとたて、の、しる・ふる 2  
きちかひにて今はいのちをかき 3  
りの山こもりも・かくまておほろ 4  
けならすいていむ事たて・たん 5  
こほちて返いらん程の・めいほく 6  
なく・仏もつらくおもほえ給へき 7  
事と・心を、こしこしらへいの 8

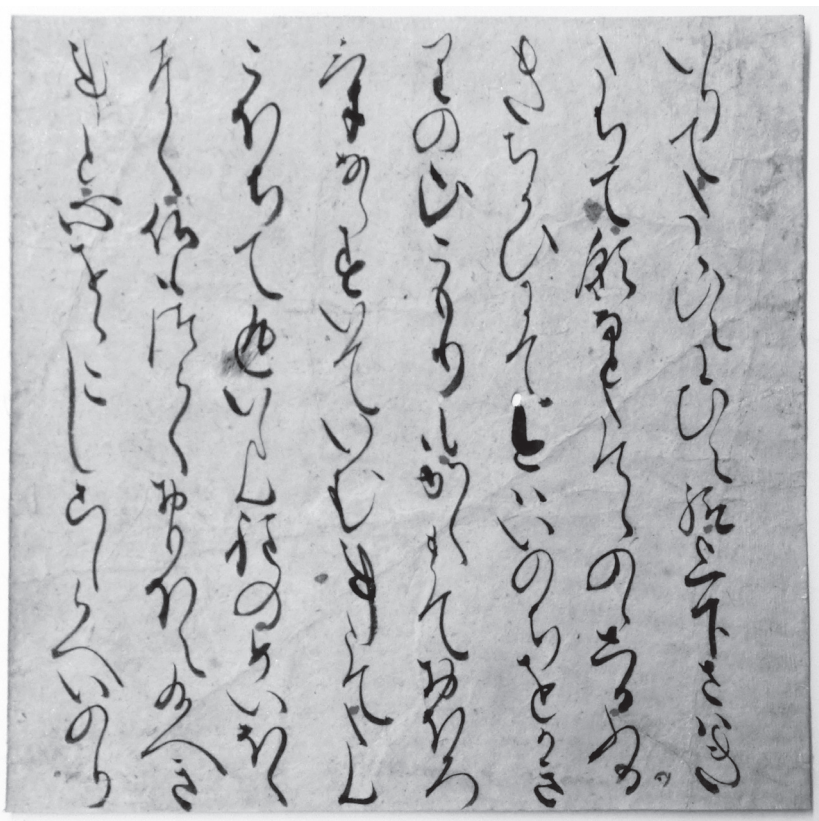
『源氏物語』夕霧の巻、夕霧の不実を揉んでいた落

葉の宮の母・一条御息所の病勢が急変する場面。『源氏物語大成』一三三八頁8〜11行目に相当するが、2行目「たて、」は別本の保坂本・国冬本・麦生本・阿里莫本等と同じく、定家本系・河内本ともに「たて」に作る。3行目「の、しる」は陽明文庫本・保坂本・麦生本・阿里莫本等と同じく、定家本系・河内本ともに「の、しり給」とする。定家本系統ではなく、朱点があるとはいえず、河内本でもないらしく、現在の分類では別本とするしかない本文であろう。なお、2行目下部、本行「ふる」と書いて、やや薄い墨でミセケチされ、右に「か」と傍書する。

手がかりは、さきに引いた先達の指針によれば、「書写年代／筆者／書風／料紙／書写内容」ということになる。とくに筆跡・寸法・書写内容（この場合、『源氏物語』夕霧の巻）を目安にするほかない。

「古筆切所収情報データベース」で夕霧の巻を検索したところ、ヒットしたのは『古筆手鑑大成』第四巻の「藻塩草」（京都国立博物館蔵）の後円融天皇の竹屋切と同一六巻の「古筆手鑑」（金沢市立中村記念美術館蔵）源氏物語抜書の二点のみ。

小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」には、後小松院の項に『別本』第52回東西老舗大古書市出品目録抄（京王新宿店・平成14年7月）―166（夕霧・1312頁3行）―



〔写真 4〕 筆者不明『源氏物語』断簡（実践女子大学文芸資料研究所蔵）

伝持為筆)」「かうやな目録『拾遺鶏肋』号外(平成10年6月)

―7 (夕霧・1312頁14行)・図版不鮮明)」「出本進氏蔵手鑑(夕霧・1322頁12行)」「京都古書組合総合目録10号―1896(夕霧・1365頁13行)」「高城弘一氏蔵無銘手鑑F(夕霧・1373頁14行)・極札欠)」の五点を掲載する。

ところが、ここでもほんとうに幸運なことに、ごく身近なところにツレとおぼしき切があった。これも最近文芸資料研究所で別途に入手した一葉(写真5)だった。(写真4)と比較していただきたい。

写真5の断簡(乙)の寸法は、縦二三・四cm、横一二・〇cmの小六半切。書写者不明切(甲)の方がやや小さいが、写真で見ればよくわかるように、甲は四囲が化粧裁ちされて小さくなったもの。一面八行書きで、朱点があること、やや右肩上がりの筆跡、そして何より乙も甲同様に夕霧の巻の断簡であることで、ツレであることは間違いない。

本文内容は、落葉の宮の母・一条御息所の葬儀に夕霧が弔問する――つまり甲に近接する場面で、

にぞ・いれたてまつる・やまとのかみ  
いて聞えて・なく／＼かしこまり  
聞ゆ・つまとのすのこにし  
か、り給て・女房たちよひいた

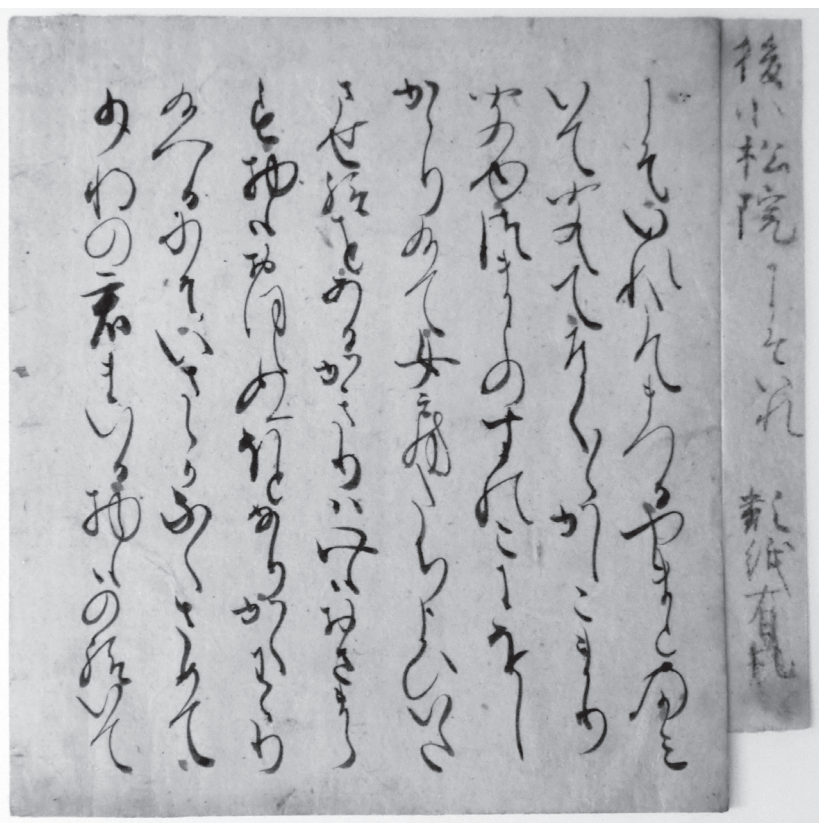
1  
2  
3  
4

させ給を・あるかきりは心はおさまら  
す・物もおほえぬほとなり・かくわたり  
給へるにそ・いさ、かなくさめて・  
少将の君まいる・物もの給いて

5  
6  
7  
8

というもの。同じく夕霧の巻、一三四〇頁11、14行目に相当する。2行目「にそ」は別本の麦生本・阿里莫本等と同じく、定家本・河内本「に」とする。2行目「いて聞えて」は諸本「いてきて」で、断簡の独自異文。4行目「給て」は定家本系横山本・河内本の七毫源氏・大島本と同じく、他の諸本は「給うて」、4行目「女房たち」とあるのは麦生本・阿里莫本、他は「女房」のみ。4、5行目「よひいたさせ給を」については麦生本・阿里莫本と同じく、鳳来寺本が「よひいたさせ給ふに」、他は「よひいてさせ給ふに」。6行目「物も」は国冬本・麦生本・阿里莫本と同じく、他は「もの」のみ。8行目「少将の君」は陽明文庫本・保坂本・国冬本・麦生本・阿里莫本が同じく、定家本・河内本は「少将の君は」とする。これも別本の本文と見てよからう。

伝称筆者の「後小松院」(一三七七―一四三三)は北朝第六代にして、後円融天皇の第一皇子。『夜の寝覚』末尾欠巻断簡の伝称筆者で知られる後光厳天皇の孫にあたる。



〔写真 5〕 伝後小松院筆『源氏物語』断簡（実践女子大学文芸資料研究所蔵）



こうして、古筆切研究の場に二枚をさらに提供できることになった。小林強「集成稿」に指摘する五点（個人蔵など現在稿者が確認できないものも含むが）、さらに「写真5」の断簡の存在によって、極札の欠けている「写真4」の切に、この後小松院の名を伝称筆者として冠することができたわけである。ツレを探索することとは、宙ぶらりんの古筆にひとまずの着地点（本文研究の座標）を与えるということなのであろう。

## 五 筆者不明断簡、その他

前節の筆者不明切と同時に入手したものの、稿者が日常に埋没して、精査の時を得ないうえに、右と同様な「幸運」に恵まれていない断簡がある。本稿の余白に掲示して、これも好学の方々の議論に供しよう。

〔写真6〕がその一葉。

寸法は、縦一六・一cm、横一六・一cm。料紙は斐紙と思われるが、陽に焼けてしまっているので、かなり文字が判読しづらい。〔写真6〕は画像処理をして、かろうじて読みやすくなっている。

もんなともいとおほくよみ給ゆき

1

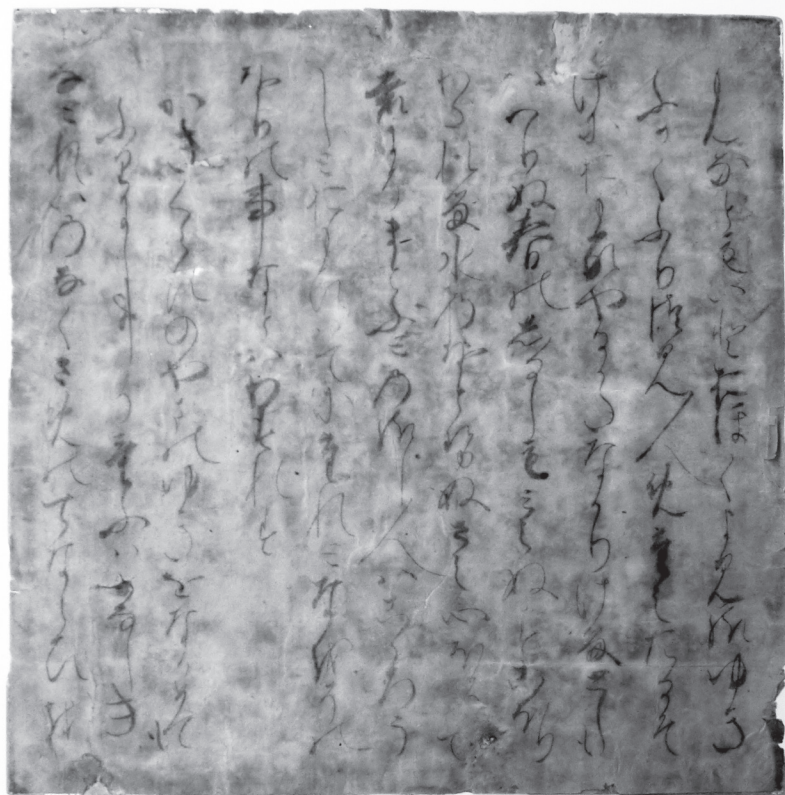
ふかくふりつみ人めたえたるそ  
けにおもひやるかたなかりけるとしも  
かへりぬ春のしるしもみえぬをこほり  
わたれる水のをとせぬさえ心ほそくて  
君にそまとふとの給し人はこゝろう  
しとおもひはてにたれとなをその  
をりの事などはわすれす  
かきくらすのやまのゆきをなかくても  
ふりにし事そけふはかなしき  
なとれいのなくさめのでたらひを

2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11

本断簡は手習の巻、小野の里に新年を迎えた浮舟が、凍てつく寒さの中、勾宮との情愛の過去を回想し、手習に歌を詠む場面。二〇四頁12行目―二〇四頁3行目に相当する。

2行目「たえたるそ」伝二条為明筆本・桃園文庫本などの別本と同じく、定家本・河内本諸本は「たえたる比そ」、4行目「みえぬ」は諸本「みえず」、6行目「こゝろうし」とは定家本等と同じだが、河内本・保坂本「心うしとは」。8行目「をりの事なとは」は、微細な異同が多く、定家本系の榊原家本「なと」を補入とし、高松宮家本・阿里莫本・国冬本等「なと」（あるいは「なとは」）を欠く。10行目「け





〔写真 6〕 筆者不明『源氏物語』手習断簡（実践女子大学文芸資料研究所蔵）

ふは」は高松宮家本・国冬本などが一致するが、定家本・河内本ともに「けふも」とする。当該断簡も別本の一種と見なすべきだろう。

この切には極札が欠けているが、実は裏面左端に書き入れがあり、「為忠卿」と墨書されている。<sup>⑦</sup>二条為忠(一三〇九―一三七三)ならば、二条為世の孫、為藤の子。『古筆名葉集』に「源氏」の記載はなく、小林強「集成稿」に「八木書店古書目録51号(若菜下)」「久曾神昇『源氏物語断簡集成』22図(蜻蛉)」の二点を挙げるものの、当該切のツレではない。

古筆切をながめていると、特徴ある筆跡のものは記憶に残りやすく、ツレを探す際にもそれが役に立つ場合が少なくない。しかし、当該断簡のように「伝為忠筆？」のような収まりの悪い断簡の場合、「どこかで見たような筆跡」と思いつつ、なかなかツレにめぐりあう「幸運」に恵まれにくい。

古筆切に精通した研究者は、この点おそろしく記憶がよいと思えない。本稿第二節に「出会い以前からの『準備』がいかに大切か」と説いたことは、もちろん稿者自身への誠めに他ならない。不学を恥じるばかりである。ひたすら諸賢の叱正を請う次第である。

## 注

(1) 池田亀鑑『源氏物語大成 巻七 研究篇』(中央公論社、一九五六年一月刊) 第二部第一章第三節「大島本源氏物語の伝来とその学術的価値」七三頁。

(2) 伊井春樹『源氏物語論とその研究世界』(風間書房、二〇〇二年一月刊)、中古文学会関西部会編『大島本源氏物語の再検討』(和泉書院、二〇〇九年一月刊)、佐々木孝浩『日本古典書誌学論』(笠間書院、二〇一六年六月刊)などの所収論文参照。

(3) 田中登「古筆切の発生と源氏物語」(実践女子大学文芸資料研究所『年報』第二九号、二〇一〇年三月)、三七頁。

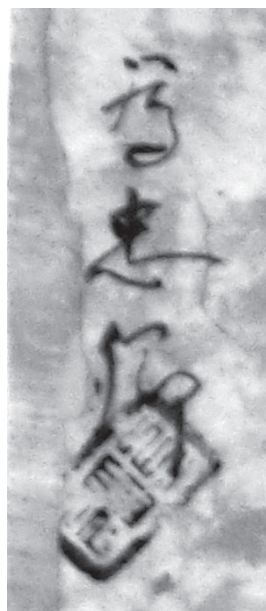
(4) 田中登『古筆切の国文学的研究』(風間書房、一九九七年九月刊) 第六章第二節「源氏物語の古筆切」三〇七頁。

(5) 横井孝「源氏物語鎌倉期本文の可能性」(中古文学会関西部会編『源氏物語 本文研究の可能性』和泉書院、二〇一六年五月刊行予定だったが、かなり遅延しており、未刊)所収。

(6) 田中登「失われた書を求めて——私の古筆収集物語」(青簡舎、二〇一〇年四月刊)、一六五―一六六頁。

(7) 書き入れに割印のような長方形の墨印が押されている。図版(写真7)参照。

(よこい たかし・実践女子大学教授)



〔写真 7〕 手習断簡の裏面